

令和5年度県民芸術劇場君津公演

# 千葉交響楽団 演奏会

指揮 山下一史 Kazufumi Yamashita

チエ口 宮田 大 Dai Miyata

管弦楽 千葉交響楽団 Chiba Symphony Orchestra

2023年11月12日〈日〉

君津市民文化ホール

大ホール

開場 13:15 / 開演 14:00

主催：千葉県／公益財団法人君津市文化振興財団／虹の音楽会

後援：安房・上総地区吹奏楽連盟／株式会社コンドー楽器



PROGRAM

ドヴォルザーク  
Dvorak

**チェロ協奏曲 短調 作品104**

Cello Concerto B Minor Op.104

第1楽章 アレグロ  
Allegro

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロツポ  
Adagio ma non troppo

第3楽章 アレグロ・モデラート  
Allegro moderato

休憩  
Intermission

チャイコフスキー  
Tchaikovsky

**交響曲第4番 短調 作品36**

Symphony No.4 in F minor OP.36

第1楽章 アンダンテ・ソステヌート - モデラート・コン・アニマ  
Andante sostenuto - Moderato con anima

第2楽章 アンダンテ・イン・モード・ディ・カンツォーナ  
Andantino in modo di Canzona b-moll

第3楽章 アレグロ  
Allegro

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ  
Allegro con fuoco

やました かずふみ  
山下一史

Kazufumi Yamashita

指揮・千葉交響楽団音楽監督



©ai.ueda

1984年、桐朋学園大学を卒業、ベルリン芸術大学に留学。1986年ニコライ・マルコ国際指揮者コンクールで優勝。カラヤンが亡くなるまで彼のアシスタントを務める。以後、ヨーロッパでの実績を重ね、ヘルシンボリ交響楽団（スウェーデン）の首席客演指揮者を務めた。

日本国内ではNHK交響楽団を指揮してデビュー、以後、国内の主要オーケストラに定期的に出演し、好評を得ている。これまでにオーケストラ・アンサンブル金沢のプリンシパル・ゲスト・コンダクター、九州交響楽団常任指揮者、大阪音大ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団常任指揮者を務め、2008年4月同団名誉指揮者に就任。2006年4月からは仙台フィルより指揮者として迎えられ、2009年4月から2012年3月まで同団の正指揮者を務める。2011年2月にはシューマン作曲歌劇「ゲノフェーファ」日本舞台初演や、2013年1月と2016年3月には水野修孝作曲歌劇「天

守物語」を指揮するなど、現在、オペラ、オーケストラの両面において、ますます注目を浴びている。

2016年4月に千葉交響楽団音楽監督に就任、「おらがまちのオーケストラ」をキャッチフレーズに、定期公演のみならず音楽鑑賞教室も積極的に指揮、千葉県民に愛されるオーケストラを目指し、同楽団の評価を着実に高めている。

東京藝術大学音楽学部指揮科教授として、後進の育成にも心血を注いでいる。

2022年4月から愛知室内オーケストラ音楽監督、大阪交響楽団常任指揮者に就任。

みやた だい  
宮田 大

Dai Miyata

チェロ



©日本コロムビア

2009年ロストロポーヴィチ国際チェロコンクールにおいて、日本人として初めて優勝。これまでに参加した全てのコンクールで優勝を果たしている。その圧倒的な演奏は、作曲家や共演者からの支持が厚く、世界的指揮者・小澤征爾にも絶賛され、日本を代表するチェリストとして国際的な活動を繰り広げている。スイスのジュネーヴ音楽院卒業、ドイツのクロンベルク・アカデミー修了。

チェロを倉田澄子、フランス・ヘルメルソンの各氏に、室内楽を東京クワルテット、原田禎夫、原田幸一郎、加藤知子、今井信子、リチャード・ヤング、ガボール・タカーチ＝ナジの各氏に師事する

マスメディアでも「小澤征爾さんと音楽で語った日~チェリスト・宮田大・25歳~」「題名のない音楽会」「徹子の部屋」「クラシックTV」などへ出演している。

録音活動も活発で、トーマス・ダウスゴー指揮、BBCスコティッシュ交響楽団との共演による「エルガー：チェロ協奏曲」をリリース。欧米盤が、欧州のクラシック界における権威のある賞の一つ「OPUS KLASSIK 2021」において、コンチェルト部門(チェロ)で受賞するなど、海外からの評価も高まっている。

最新アルバムは2023年10月に『VOCE - フェイヴァリット・メロディー -』をリリース。

近年は国際コンクールでの審査員や、2019年ロームミュージックセミナーの講師を務めるなど、若手の育成にも力を入れている。

使用楽器は、上野製薬株式会社より貸与された1698年製A. ストラディヴァリウス“Cholmondeley”である。



◆ドヴォルザーク作曲 チェロ協奏曲 口短調 作品104

チェロを独奏楽器とする協奏曲はピアノ協奏曲やヴァイオリン協奏曲に比べると格段に数が少ない。一般的なコンサートで採り上げられる作品と言え、時代順に、ハイドンの第1番はハ長調と第2番ニ長調、シューマンのイ短調、ラロの二短調、サン＝サーンスの第1番イ短調、チャイコフスキーの『口ココの主題による変奏曲』、ドヴォルザークの本作、エルガーのホ短調、ショスタコーヴィチの第1番変ホ長調と第2番ト長調といったところだろう。それらの中でも堂々の王座を占めるのが、チェコのアントニン・ドヴォルザーク（1841-1904）がアメリカ滞在中の1894～95年に書きあげた本作である。

ボヘミアの小村ネラホセヴェスに宿屋兼肉屋の息子として生まれたドヴォルザークは、家業の継承を希望する父親を説得してプラハのオルガン学校に進む。卒業後、教会オルガニストや劇場のヴィオラ奏者を務めながら地道に作品を書き続けた。この間、新進女優兼歌手のヨゼフィーナ・チェルマーコヴァーに恋をして彼女のために何曲かの歌曲を書くが、彼女の選んだ結婚相手は裕福なコウニッツ伯爵であった。

しかし幸い、ヨゼフィーナの妹アンナの心を射止めた彼はアンナと温かな家庭を築き、愛児3人の相次ぐ死、という信じ難い悲嘆事を乗り越えて創作に励んだ。そして36歳のとき、オーストリア政府の奨学金に応募して審査員のブラームスに認められ、その勧めで書いた《スラヴ舞曲集》の大ヒットを機に国内外に名声を高めていく。慶事は重なり、妻との間に再び子宝を授かり始め、最終的に6人もの子福者となった。

1891年春、ニューヨークのナショナル音楽院の経営者ジャネット・サーバー夫人（1852-1946）が彼に同音楽院の院長就任を要請してきた。呈示された1万5,000ドルの年俸はオーストリア通貨の約3万グルデン。現在の邦貨換算でおよそ7500万円。この年から就任したプラハ音楽院作曲科主任教授の年俸は1200グルデンであったから、その25倍である。ボヘミアの自然と人情をこよなく愛する彼は逡巡の末についにこの話を受け、1892年9月から95年4月まで、途中の一時帰国を挟んで約2年半のアメリカ生活を送り、アメリカの事物の印象を反映させた一連の傑作群を生んだ。

このチェロ協奏曲は、交響曲第9番『新世界より』、弦楽四重奏曲第12番『アメリカ』に続くアメリカ時代の最後を飾る大作である。滞在中、彼は強い望郷の念に苦しんだが、1894年夏に一時帰国してプラハ近郊ヴィソカー村の別荘で心身を癒すことができた。だが一方、久々に再会したヨゼフィーナの顔色の悪いことが彼の心を暗くした。休暇を終えて



ニューヨークに戻った彼は、かねて同郷のチェリスト、ヤヌシュ・ヴィーハン（1855-1920）から依頼されながら棚上げ状態となっていたチェロ協奏曲に11月から着手する。彼はこの曲に、故郷ボヘミアへの熱い思いと、アメリカで得た音楽的啓示を盛り込むとともに、第2楽章中間部にヨゼフィーナが愛唱した彼の歌曲『わたしを一人にして』Op.82-1の旋律を採り入れた。こうして本作は1895年2月に一旦完成する。

春になって彼はアメリカを去り、懐かしいボヘミアに帰国を果たした。すると翌月、ヨゼフィーナが永眠した。妻アンナと抱き合っ泣いた彼は、涙が乾くとこの曲の第3楽章のコーダを書き直し、ここにもあの歌曲の旋律を盛り込むとともに、彼女の魂が静かに天に昇っていくかのような夢幻の如き終わり方に変更した。この大幅変更をめぐって本来の依頼者ヴィーハンと意見の対立があり、また、初演予定日にヴィーハンの都合がつかなかったことから、1896年3月19日ロンドンでの初演は、イギリスのチェリスト、レオ・スターンの独奏によっておこなわれた。ただし、ヴィーハンと仲違いしたわけではなく、曲は彼に献呈され、ヴィーハンもその後各地でこれを演奏している。

**第1楽章：アレグロ、ロ短調、4/4拍子。**

クラリネットの独り言のような第1主題の呈示、ホルンによる民謡風の第2主題の呈示ののち、独奏チェロが王者の風格の第1主題から登場する。展開部では主に第1主題を扱い、再現部は第2主題から開始して、最後は第1主題によるコーダで力強く楽章を結ぶ。

**第2楽章：アダージョ・マ・ノン・トロppo、ト長調、3/4拍子。**

3部歌謡形式。牧歌的な第1部が終わると、突然ト短調の激しい和音導入が響き、次いで独奏チェロが作曲者自身の歌曲『わたしを一人にして』の胸に染み入るような旋律を歌いだす。

**第3楽章：アレグロ・モデラート、ロ短調、2/4拍子。**

ボヘミア舞曲風のリズムを持つ力強い主題によるロンド・フィナーレ。このロンド主題Aの間に切々とした表情のBと、憧れに満ちたCの2つの副主題が差し挟まれて次第に感興を高めていき、最後はロ長調に転じて感動的な結末を迎える。独奏チェロには極めて高度な技巧が求められている。

独奏チェロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2

【楽器編成】 ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ  
トライアングル、ティンパニ、弦5部



◆チャイコフスキー作曲 交響曲第4番 ヘ短調 作品36

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840-1893）は、地方官吏だった父親の任地、モスクワの東700キロの鉱山町ヴォトキンスクに生まれた。一家は彼が8歳のときモスクワに、次いでペテルブルクに移ったので、彼はペテルブルクの法律学校に学んだのち法務省の官吏となる。だが、少年時代から音楽への夢を温めていた彼は、22歳の秋、法務省を辞して創設されたばかりのペテルブルク音楽院に入学、卒業後、モスクワ音楽院の教師を務めながら作品を書き始めた。

音楽院勤務に時間をとられて作曲に専念できないことが彼の悩みの種であったが、1876年12月に文通の始まったナデージダ・フォン・メック夫人（1831-1894）という資産家から、文通のみの交際、という条件で、年6000ルーブルという多額の資金援助の申し出を受ける。こうして心おきなく創作に専念できるようになった彼は、夫人への手紙に現在作曲中の交響曲のことに触れ「完成したらこれを貴女に捧げたい」と感謝の気持ちを表明している。それがこの交響曲第4番のことだ。

ところが、それから間もなく、彼は、モスクワ音楽院での教え子を自称するアントニーナ・ミリューコヴァという女性から結婚を迫られ、1877年7月6日に彼女と結婚してしまった。だが、彼の繊細な神経は思い込みの強すぎる彼女との生活に適合できず、彼はすぐに妻の元を去って自殺未遂事件まで起こしてしまう。メック夫人は彼を気遣い、十分な旅費を援助してスイスやイタリアで養生させてくれた。おかげで、イタリアのサン・レモ滞在中の1878年1月、彼は作曲中の交響曲を完成させることができた。曲はこの間の一連の苦悩が反映された自伝的な作品となり、4つの楽章を通じて「運命との闘争から勝利へ」というテーマが貫かれている。1878年2月にモスクワで初演された曲はメック夫人に捧げられた。彼は夫人宛ての手紙に「人生とは、辛い現実と束の間の幸せな夢との絶え間のない交錯です」と述べ、曲はそれを反映したものであることと、各楽章の詳しい解説まで丁寧に記した。

**第1楽章：序奏はアンダンテ・ソステヌート、ヘ短調、3/4拍子。**

**主部はモデラート・コン・アニマ、ヘ短調、9/8拍子。**

序奏冒頭、ホルンとファゴットが最強奏で呈示するファンファーレ風の「運命の動機」が曲全体を支配する。主部の第1主題は粘りのあるもので「ワルツの動きで」と解説されている。ファゴットに導かれた第2主題は楽句の語尾を彩る他楽器のエコーが印象的だ。こ



の主題は「甘い柔らかな夢」と解説されている。曲は両主題によって進むが、クライマックスには序奏主題が顔を出して全体を貫く運命的性格を刻印する。

**第2楽章：アンダンテ・イン・モード・ディ・カンツォーナ、変口短調、2/4拍子。**

「哀愁を表現している」と解説されている楽章。悲哀の色調漂うオーボエの旋律から開始される。

**第3楽章：アレグロ、ヘ長調、2/4拍子。**

スケルツォに相当する楽章。最初の部分では弦全体がピツィカートのみで焦燥感のある旋律を奏でる。木管による舞曲風の部分、金管の行進曲風の部分を経て再び弦のピツィカートが現れ、全楽器によるコーダで終結する。

**第4楽章：アレグロ・コン・フォーコ、ヘ長調、4/4拍子。**

一種のロンド形式。打楽器を伴う強奏による強烈な第1主題から始まる。続いてロシア民謡「野に立つ白樺」をもととする第2主題が示される。2つの主題はいずれも下行音型によっている。さらに躍動的な第3主題も現れ、3つの主題が絡み合いながら賑やかに進む。騒々しいまでに陽気な楽章だが、その背後に忍び寄る運命の黒い影を感じさせる、意味深長なフィナーレである。

ピッコロ 1、フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2

**【楽器編成】** ホルン 4、トランペット 2、トロンボーン 3、チューバ

ティンパニ、トライアングル、シンバル、バスクラム、弦 5 部。



# 千葉交響楽団

Chiba Symphony Orchestra

管弦楽



千葉交響楽団は、1985年に「ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉」として発足以来38年間、県内唯一のプロのオーケストラとして、音楽文化の創造・発展を使命とし、地域に根差した音楽活動を続けております。

定期演奏会をはじめ、県民芸術劇場や各地での演奏会など、毎年およそ50回のコンサートで演奏し、千葉県の音楽文化の向上に努めています。また、千葉県及び各市町村教育委員会の共催事業である「小中高等学校音楽鑑賞教室」や特別支援学校への訪問演奏を、年間100校ほど実施し、児童生徒に生のオーケストラの持つ素晴らしいハーモニーと迫力を届け、音楽教育にも多大な貢献を果たしています。

2016年4月からは山下一史氏を音楽監督に招聘し、同年10月に名称を千葉交響楽団に改め、同氏の指導のもと演奏水準のさらなる向上に取り組み、その新鮮で熱気あふれる演奏は高い評価を得ています。

より多くの千葉県民に「おらがまちのオーケストラ」と親しみを持って呼ばれ、県民が誇れるオーケストラを目指して着実に歩みを進めています。

【公式ホームページ】 <http://chibakyo.jp/>